

## ● 最優秀賞

# 総合的な学習「日本らしさって何だろう」(第1学年) の指導

東京都羽村市立羽村第二中学校 みずのみすず  
水野美鈴

## 1 はじめに

平成16年春本校に赴任し、3学年所属で「総合的な学習の時間」(以下「総合」)の担当になった。本校の「総合」は、1年生は「地域」、2年生は「世界」、3年生は「地域」について学習することになっている。16年度は、「地域」を中心としたテーマ「トイレを切り口に町作り・ボランティアを考える」を企画し、実践した。しかし、1年間指導する中で、本校の「総合」には、「日本」という視点が欠けていることに気づいた。17年度、1学年所属で再び「総合」の担当になった。1年生は、「地域」について学習するのだが、「地域」だけではなく「日本」についても併せて考えさせる学習を企画したいと考えた。

その理由は、私は平成15年夏休み、イギリスに1ヶ月間短期の語学留学をしたが、ホームステイ先でも英語学校でも求められたのは、「日本に関する知識」「日本人としての考え方」だった。これからの生徒たちは国際社会の中で生きていく。その時、①自国の文化に深い理解と愛情を持ち、必要に応じてそれを外国人にも伝えられる人、②他国の文化を理解し、現地の習慣や伝統を尊重し、よい面は積極的に学んでいこうとする人、③どこの国、どの民族とも友好理解を心がける姿勢を持ち続ける人に育ってほしいと願って「日本らしさって何だろう」の「総合」を企画し、実践した。

## 2 授業計画

- (1) 対象生徒…羽村市立羽村第二中学校 1年生 5クラス 167名
- (2) 時期と時数…平成17年4月～18年2月 2週間に3時間ある「総合」の時間
- (3) 指導の目標
  - ①「日本らしさって何だろう」というテーマで講演を聞いたり、体験したり、表現したり、他の生徒の発表を聞くことを通し、ものの見方、考え方を広げさせる。
  - ②日本人としての自覚をもち、それをもとに世界の人々と共生していける資質を養う。
  - ③諸活動を通し、課題を発見し、解決する能力を培うとともに、自分の考え、意見、研究成果を効果的に表現する能力を育成する。
  - ④自己評価、相互評価を取り入れ、研究成果や残された課題を考えられる能力を養う。

## 3 指導の工夫

「日本らしさって何だろう」の学習を企画するにあたり、3本の柱を立てた。一つ目は、講演会、二つ目は、体験学習と作品制作、三つ目は、生徒の主体的な活動である。この3本の柱となる活動は、同時進行の形で行った。3本の柱の目標は、①講演を聞いて「日本らしさ」についてだんだん考えを深めていく。②日本らしいものを持ち寄ったり、日本らし

い伝統文化や工芸やスポーツを体験したり、クリスマスカード作りをすることを通して体を通して実感として日本らしさについて考える。③日本らしいアニメーション作りの案を考えたり、「日本らしいもの」について各自が7ヶ月にわたってレポート作りに励んだりすることによって、独自の「日本らしさ」についての考えを持つ。以上3点をねらったものである。3本の柱ともに学習後には、感想文書きや発表会を設定している(資料1参照)。

## 4 指導の実際

### (1)講演会

講演会は、4月から12月にかけて9回行った。講師は、全て羽村市在住または、近隣にお住まいの方をお願いし、「地域」という点を意識した人選にした。

第1回は、日本を紹介する番組を世界に向けて制作している映画ディレクターの五嶋正治氏による「アニメ童話から読みとる日本」。五嶋氏関わって製作した『Animated Tales of the World』(国際子どもメディアサミット)日本代表作品の「雪渡り」(宮沢賢治作)のビデオ(13分)を見た後、どんな点に日本らしさを感じるかを考えた(日本らしい自然美、日本らしい音など)。第2回は、スウェーデン人の尺八奏者リンデル・ゲンナル氏の「日本的コミュニケーションで何?」。日本文化特有の余裕のある柔軟性と相手に理解をゆだねる曖昧さを指摘する講演だった。第3回は、南米で15年以上勤務の経験を持つ元新聞記者、清水武氏の「すてきな地球人」の講演。南米で日本人への偏見により差別された体験などをもとに、すてきな地球人、国際人になるためにはどうしたらよいかについて話していただいた。第4回は、表具師の牛田のり子氏による「日本の伝統美」。江戸時代の屏風、掛け軸などをお持ちいただき、表具の歴史や日本人の美意識などについてのお

話だった。第5回は、羽村市在住の漆工芸作家、並木恒延氏の「漆のこと知ってますか?」。並木氏は、2003年第42回日本現代工芸美術展において内閣総理大臣賞を受賞した著名な漆工芸作家である。漆工芸作りのビデオ(15分)を見た後、作品を見せながら生い立ちや作品作りにかかる思いを話してくださった。第6回は、羽村市在住の外国籍の方8名(フィリピン人3名、中国人2名、韓国人1名、ペルー人1名、タイ人1名)にいらしていただき、各分科会で話していただいた。講演内容は、自分の国の紹介、自分の国と日本を比べて感じたこと(びっくりしたこと、困ったこと、良いと思ったこと、日本もこうしたらよいと思ったことなど)。第7回は、モンゴル人の青年メルゲン・リンツェンドルジ氏による「私の国の『ありがとう』」。パワーポイントでモンゴルの風景や特徴を紹介し、「ありがとう。」と気軽には言わない日本人との習慣の違いについて話してくださった。第8回は、和の香水作りに携わる原田知子氏の「和の香り」。自分で作った香水を生徒全員に3種類ずつ嗅がせ、どれが「日本」らしいか質問後、自分が日本人だから日本らしい香りが作れるのだと話された。第9回は、佐分利直氏。佐分利氏は、本校のすぐ傍にある日野自動車工業株式会社の人事部人材開発グループ長で、日本の自動車の販売台数が世界一で、海外で高く評価される理由は、努力し、「改善」を常に心がけているからだと話された。

### (2)体験学習・作品制作

生徒による作品制作と体験学習は、①「日本らしさ」を感じるものを各自が持ち寄り、発表しよう、②「日本らしい文化・スポーツ」を体験しよう(10分科会)、③「日本らしいクリスマスカード」を作り羽村市内の養護老人ホームや障害者施設に送ろう、④百人一首大会(日本らしい伝統行事)をしよう(体育館で学年全員で実施)を行った。②④以外は、全て8つの分科会に分けた。167名

の生徒をほぼ均等に20名程度に分け、学年の8名の教師全員がそれぞれの分科会担当となり、指導にあたった。「日本らしい文化・スポーツ」の体験学習の講師は、全員羽村市在住の方にいらしていただき、「地域」との関わりを重視した。

①日本らしい品物を持ち寄る（6月）

自分が「日本らしい」と感じたものを持ち寄り、どこが日本らしいかを発表し合う。（例）扇子、竹刀、お手玉、風呂敷、浴衣、けんだま、折り紙、おはじき、茶の湯の道具類など。

②日本らしい伝統文化、工芸、スポーツの体験学習（9～10月）

日本らしい伝統文化、工芸、スポーツなどが体験できる分科会を10個開設した。希望に添って10～23名に分かれ、2時間続きの「総合」を使い、3回にわたって体験した。その後、分科会ごとに「体験内容、作品または実技披露、感想、体験を通してわかったこと」を体育館で発表した。10分科会の内訳は、琴、折り紙、生け花（草月流、小原流）、茶道、将棋、竹細工、空手、合気道、日本舞踊である（資料2・3）。各分科会とも回を重ねるごとに高度な技術に挑戦し、発表にも工夫を凝らし、見栄えのする発表となった。

③日本らしいデザインのクリスマスカード作り（11月末～12月初め）

日本らしいデザインとは何かを考え、クリスマスカード大のケント紙に絵を書き、彩色する（鶴、舞妓さん、富士山、歌舞伎、こたつとミカン、桜、五重塔などデザインは様々）。英語科の指導でクリスマスカードの文面のモデルを数種類習い、それをもとに文面を書く。1週間廊下掲示し、みんなの作品を見た後、市内の8つの養護老人ホームや障害者の施設の方たちにクリスマスカードを送った。お礼のお手紙をいろいろな施設からいただいた。

④百人一首大会（12月下旬）

日本らしい伝統行事としてクラス対抗で百

人一首大会を行う。百人一首を覚えるために5月から国語科の授業を使って継続的に暗唱し、全員30首以上の暗唱を目指して臨んだ。

(3)生徒の主体的な学習

①「世界に向けて日本らしいアニメを発信するなら」の作品作り

五嶋正治氏の講演を受けて、五嶋氏が「雪渡り」で世界に日本らしいアニメを発信したように、生徒たち自身が、世界に向けて日本らしいアニメを発信するならどうするかを考えさせた。4人一組のグループを作り、まず一人一人が小説や物語を探し、持ち寄った。その中からグループ代表の作品を決定し、(ア) あらすじ、(イ) 登場人物を決め、その原画を画用紙に書く、(ウ) どんな方法で「日本らしさ」を表現するかを考える、(エ) どんなメッセージをどのように伝えるかを考える、(オ) 音楽、映像、カメラアングルなどで工夫したいことを考えさせた。分科会内で全グループが上記のことを発表し、分科会代表を決めた。8つの分科会代表が、リハーサル後、体育館で全体発表会を行った。分科会代表作品は、『わらしべ長者』『わらぐつの中の神様』『我が家のお稲荷さま』『竹取物語』『さるかにばなし』『飛べないホタル』『竜神さまの嫁こ』『鶴の恩返し』である。

②レポートの作成と発表会

レポートの作成は、夏休みから1月末までかけて「日本らしいもの」を各自が選び、図書、雑誌、新聞、インターネット、インタビュー、実地見学などで調べ、レポートにまとめ、発表する。レポートの発表は、10月に中間発表、1月に本発表を全員が行った。

この指導にあたっては、まず、『日本人』を知る本 人・心・衣・食・住（岩崎書店2004年）の5冊分の目次、索引を印刷して配布し、どんなテーマが考えられるかのヒントを与えた。さらに「調べる学習賞コンクール」の入賞作品の「目次、研究の動機、予想、研究の方法、準備する物、研究のまとめ（わ

かったこと)」の部分印刷し、配布した。さらに「レポート作成計画表」を配布し、「調べたいテーマ、調べたいと思った動機、予想、調べたいことがらと調べる方法」について書かせた。また、「調べる学習賞コンクール」の入賞作品23冊を「図書館の学校」から貸し出ししていただき、国語科の時間を使って回し読みさせ、どんなレポートが優れた内容のレポートなのかをわからせた。

夏休みの宿題でレポートを提出させ、分科会担当教師が添削し、返却。その後、中間発表会を持ち、課題を再認識し、さらに1月末まで研究を続け、本発表を全員に行わせた。テーマは、着物、障子、お香、ワサビ、茶道、雛人形、三味線、納豆、歌舞伎など多数。

## 5 実践の成果

①生徒が主体的に学ぶ学習である「世界に向けて日本らしいアニメを発信するなら」と、「日本らしいもの」のレポート制作は、時間をかけて取り組み、自分たちの力でやり遂げたので、特に「日本らしさとは何か」について考えるきっかけを与えることができた。

②講師については、幅広く、有益なお話をうかがえる方を選べた。講演後は必ず、感想文、またはお礼状を書いたり、感想発表会を行ったので、講演内容を振り返ることができ、表現力を高めることもできた。

③体験学習は有益だったと考える。2時間続きの「総合」を3回使って充実した学習ができた。初めて体験する学習内容であったが、楽しんで取り組んだ者が多い。また、体験学習発表会においても、学んだことをよくまとめ、効果的に発表することができた。学習後の感想文や講師へのお礼状も充実した学習ができたことがうかがえる内容が多かった。

④多くの発表会を分科会内や全体発表会で行った。「評価票」をもとに他の生徒の優れた発表に触れ、自己評価、相互評価ができ、

自分の発表に役立てる刺激にもなった。

## 6 活動時の作品例および活動後の生徒の感想

### (1)「世界に向けて日本らしいアニメを発信するなら」の分科会代表作品例（6月末）

『竜神さまの嫁こ』をアニメの原作としてグループ代表に選んだ班は、あらすじ、登場人物の紹介と服装、性格の特徴を言葉と絵で表現し、昔の結婚式のイメージを説明した後、日本らしさやアニメにする工夫、世界に伝えたいメッセージについて次のように語った。

「この民話では、いくつかの日本らしさを感じることができました。昔は、とても神というものを信じていたこと。神様に誓ったことは、例え自分の娘を捧げるというような身を切られるような辛いことでも守ったこと。自分を犠牲にして人に尽くすことなどです。

この物語をアニメに作るとしたら、風景は、現実の写真を使い、家や人物は、素朴な絵で表現したいと思います。主人公のせりふは、方言が合っていると思います。同時にその方言を使って世界に伝えるメッセージを表現したいです。それは、雨を降らしてほしいと願っている村の百姓たちを、自分の娘を犠牲にしてまで助けた庄屋さんの真心を表す言葉です。私たちはこのアニメを通して日本の良さを一つでも世界の人々に知ってほしいです。」

このグループは、4人それぞれの生徒が、『竜神さまの嫁こ』『はだしのゲン』『ふしぎな福袋』『向こう横町のお稲荷さん』を候補作品として持ち寄った。『竜神さまの嫁こ』以外の作品の選択理由と世界に向けて伝えたいメッセージを簡単に紹介する。

作品	『はだしのゲン』	『ふしぎな福袋』	『向こう横町のお稲荷さん』
日本らしさ	日本は、原爆を落とされた世界でただ一つの国だから。	昔のお金やぞうり、着物、お寺、福袋などが出てきて日本らしいから。	日本の昔話で水飴屋や紙芝居屋などが出てきて、水飴、紙芝居が日本らしいから。
伝えたメッセージ	もう二度と原爆投下の悲劇は繰り返さないでほしい。	貧しくても正直に、優しい心を持って暮らしていればいいことがある。	日本の昔の風景や、日本の昔の人の豊かな心や歴史を伝えたい。

## (2) 体験学習全体発表会後の生徒の感想文

(10月中旬)

「生け花が日本らしいと思いました。私は、生け花を初めて習いました。そして、花を生ける時にはいくつかの一定の型があり、それにそって生けるときれいにかっこよく生けられることがわかりました。日本には四季があり、四季それぞれの花が咲きます。その季節感を大切に、季節を楽しみながら人をもてなす心が日本らしいと思います。一輪の花の美しさをどう生かすか考える楽しさがわかりました。同じ材料でも生ける人によって全く違った感じの作品になることも驚きでした。花を生けていると心が穏やかに和やかになります。こうした心のゆとりも日本らしさかなと感じ、大切にしたいと思いました。」

## (3) 1年間の「日本らしさって何だろう」の学習を振り返っての感想 (2月中旬)

「ワサビ」について調べたT男は、ワサビの名前の由来、ワサビの産地・生育条件、ワサビ栽培の歴史、ワサビの働き、ワサビの辛さ、ワサビのすり下ろし方、ワサビを使った料理などを本やインターネットで調べた後、奥多摩のワサビ田に実地見学に行き、ワサビ栽培のコツなどを現地の人に聞いてきた。写真入りで75ページのレポートをまとめた。T男のレポートの最後の感想の部分には、「僕は、レポートを書く前は、ワサビと言えば辛い、寿司や刺身に使われるぐらいの知識しかなかった。しかし、7ヶ月にわたって本やインターネットで調べてみたり、奥多摩に出かけたりしているうちに、知らなかったことが

たくさんわかった。おもしろく、嬉しく、そして何より驚きというものがあった。こんなに厚いレポートが仕上がり、レポートを書いた甲斐があったと思う。」とある。

「寺子屋」について7ヶ月間調べ続けたN子は、一番最後の感想文に次のように書いた。

「寺子屋。このことから私は、いろいろなことを学びました。寺子屋とは、室町時代ごろから子どもたちに勉強を教えていた所です。現在の小・中学校や学習塾の原点とも言えます。この寺子屋について夏休みからレポートをまとめました。入学して一番初めの「総合」の時間、私は正直言って「日本らしさなんて学校で学ぶことなの？」と疑問に思いました。でもだんだんとその気持ちはどこかへ行き、今では「このテーマで学習できて本当によかった。」と思えるようになりました。そしてその中で一番私に力をくれたのは、この「寺子屋」についてのレポートだったと思います。夏休み後にレポートを提出した時は、「日本らしさ」とは何かかわからず、その答えを出すために後半改めてチャレンジしようと決意しました。そして、私は、自分なりの答えが出せたと思います。「日本らしさって何だろう」――一つ目は、礼儀正しいところ、二つ目は、目上の人を敬うところ、三つ目は、感謝の心を大切にすることです。けれど今の日本人にはこの大切な3つを失い始めている人がたくさんいます。私は、日本人に自分なりの「日本らしさ」を見つけてほしいです。私も一人の日本人として自分なりの日本らしさを失わないように頑張っていきたいです。」

## 7 今後の課題

レポートを書かせる指導が一番の課題である。どのように有益なテーマを選ばせるか、テーマを砕き、どのような小テーマを設定させるかの指導法を考える必要がある。そのためには、個々の生徒と指導者との時間をかけた話し合いや指導が必要と考える。また、インターネットの情報だけでレポートをまとめる生徒が多い。インターネットだけでなく、活字メディア、実地見学、インタビューなど幅広い情報収集の方法を学ばせたい。

## 8 実践を終わって

この実践は、私に「総合」の大切さ、可能性を再認識させるものだった。実は20年ほど前、私は、国語科で「日本らしさ」について学習させたいと考えたことがあった。それは、『海外の教科書にみる異国ニッポン・グラフィティ』（JATEC出版 1983年）を読んだことがきっかけだった。日本についての間違った知識や偏見が滑稽な印象で外国の教科書に紹介されている例が載っていた。外国人に日本人はどう見られているのだろうか、日本らしさって何なんだろうという疑問がわき起り、10数冊の関連図書を買集めた。しかし、国語科の授業としては、そのうちの何冊かを紹介したり、文章を数編読ませただけで終わった。その後「日本らしさって何だろう」とい

う疑問がずっと残った。

本実践が実ったのは、こうした疑問が私の中にあって、日本らしいクリスマスカードを買集めたり、日本らしい文化や職人芸をもった人たちの記事を切り抜いておいたりしたことが一つの鍵である。しかし、何より成果として大きかったのは、「総合」で9回も講演を聞かせたり、体験学習を存分にさせることができたり、「世界に発信するアニメ」の案を考えさせたり、レポート作りなどの主体的な学習を長い期間させることができたことだ。国語科の学習では、例え20年前、アイデアがあったとしてもこうした学習はできなかった。「総合」だから1年間かけて幅広い充実した学習ができたのだ。

今、「総合」は、不安定な位置にある。準備の大変さや成果の評価をめぐり『『総合』なんてもういらない。』という声も聞かれる。しかし、私は、「総合」こそOECDのPISA学力調査で求められているような実社会で役立つ学力を養うことができるものだと考える。雑誌、小説、新聞、インターネット、広告、ビデオ、テレビなどの情報を読んだり見たりして知識を得、自分で実際に体験し、レポートを書いたり自分の意見を発表したりして表現してみても初めて実社会で役立つ知識は身に付くのだ。こうした意味でも私自身も今後も「総合」を大切にしていきたいし、「総合」を衰退させないように努力をしていきたいと考える。

### ●資料1/平成17年度 第1学年 総合「日本らしさって何だろう」活動内容関連表

月	日	講演会 講演会後の感想発表	体験学習・作品制作・発表学習	主体的学習・発表会
4	27	①五嶋正治氏（映画ディレクター）「童話から読み取る日本」 ↓ ・講演を受けて「雪渡り」のメッセージを考える。		「私たちが世界に向けて“日本”らしい物語や小説のアニメメッセージを発信しよう」  「日本らしいアニメを発信するのならこの原作で」の物語・小説を各人が探す
5	11	②リンデル・グナル氏（スウェーデン生まれの尺八奏		

		者)【日本のコミュニケーションで何?】→感想文		
	18			「外国に向けて日本らしいアニメを発信するならどの小説・物語が適しているか」のグループ内話し合い
	25	③清水武氏(南米生活が長い元新聞記者)【すてきな地球人】→感想文		
6	1			「日本らしいアニメを発信するならこの原作で」の分科会内りハーサル
	8			「日本らしいアニメを発信するならこの原作で」の分科会発表会
	17	④牛田のり子氏(屏風制作などの経師) 【日本の伝統美】→感想文	各自が日本らしい品物を探す	
	22	⑤並木恒延氏(漆工芸作家) 【漆のこと知ってますか?】→感想文	「日本らしさ」を感じる品物を各自が持ち寄り、見せ合う。	
	29			「日本らしいアニメを世界に発信するならこの原作で」の分科会代表班の発表会
7	6	⑥市内在住の外国籍の方、8名から分科会で話をうかがう。(日本に来て困ったこと、日本の良さなど)→感想発表		
	15	「市内在住外国人の方の講演」分科会代表発表会(講演内容・感想・質疑応答)		
	20	⑦メルゲン・リンツェンドルジ氏(モンゴル人の青年) 【私の国の「ありがとう」】→感想文		夏休み中の宿題「日本らしいもの」を選び、レポートにまとめるためのオリエンテーション
8	31		「日本らしいものを体験しよう」のオリエンテーションとグループ分け	↓ 宿題提出
9	7		「日本らしいもの」の体験学習(第1回)	
	21		「日本らしいもの」の体験学習(第2回)	
	28	⑧原田知子氏(香水会社社長) 【和の香り】→感想文		
10	5		「日本らしいもの」の体験学習(第3回)	
	12		「日本らしいもの」の体験学習発表会(10分科会) 【体験内容、作品・実技披露、感想、わかったこと】	↓

	19			夏休み宿題レポートの分科会内発表会
	26			レポート見直し計画
11	2			レポート分科会代表者発表会
	9		「日本らしいクリスマスカード」を作ろう（第1回）【日本らしいデザインを考えよう】	
	16		「日本らしいクリスマスカード」を作ろう（第2回）【カード制作】	
	30		「日本らしいクリスマスカード」を作ろう（第3回）完成→掲示後、羽村市内の養護老人ホーム・障害者施設に発送	
12	7	⑨佐分利直氏（日野自動車工業人事部人材開発グループ長）【日本車が海外で評価されるわけ】		
	14		日本らしい伝統行事【百人一首大会】	
	21			↓ 本発表にむけての準備
1	11			本発表のリハーサル
	13			レポート本発表会（第1回）
	18			レポート本発表会（第2回）
2	8		1年間、「日本らしさって何だろう」について学んでの感想（分科会内で全員が発表）	
	15		分科会代表者による「日本らしさって何だろう」を学んでの感想発表会	



●資料2／和楽器（琴）の体験学習



●資料3／空手の体験学習